

KEIO SFC REVIEW

キャンパスを越えて 学ぶSFC生

富田勝 / 荒川和晴 / 長谷部 葉子 ほか

SFC25周年 これまでの25年と これから

秋山 美紀 / 東海林 祐子 / 飯島 富士男氏
加藤 文俊 / 國枝 孝弘

ようこそ、新任教授
鳴川 肇 / 鄭 浩瀾

おとなりの研究会
新保 史生 / 一ノ瀬 友博

sficsm
立石 諒

when I was young
小澤 太郎

No.

58



Table of Contents

特集

キャンパスを越えて学ぶ SFC 生	02
分野を越えるということ	04
鶴岡タウンキャンパス紹介	07
三田で学んでいる学生鼎談	09
メディアコミュニケーション研究所の紹介	11
海外で学ぶ SFC 生鼎談	12
「同質性」から異言語・異文化を発見し、コミュニケーションする面白さ	15
SFC 25 周年 これまでの 25 年とこれから	16
25 周年にむけて	16
SFC と地域のつながり	18
あこのころ	20
SFC の国際交流	22

連載

ようこそ、新任教授	24
鳴川 肇 政策・メディア研究科准教授	
鄭 浩瀾 総合政策学部准教授	
おとなりの研究会	30
新保 史生 総合政策学部教授	
一ノ瀬 友博 環境情報学部教授	
sfcism	34
立石 諒 環境情報学部 2012 年度卒業	
When I was young	36
小澤 太郎 総合政策学部教授	
From Editor	40

鶴岡タウンキャンパス

湘南藤沢キャンパス学生（1,2学期間*）

※鶴岡タウンキャンパスでは、バイオインフォマティクス（生物情報学）とゲノム生物学を融合した最先端のバイオ研究を行っている。SFC生の希望者は短期または長期滞在することができる。

学ぶSFC生

芝共立キャンパス

薬学部、薬学研究科

三田キャンパス

文学部（2~4年生）、経済学部、法学部、商学部（3,4年生）、文学研究科、経済学研究科、法学研究科、社会学研究科、商学研究科、法務研究科

各地に広がる慶應のキャンパスたち

慶應義塾大学には各地にキャンパスがある。私たちは所属している学部で学ぶためにキャンパスへ通っているが、必ずしもひとつのキャンパスでしか学べないわけではない。慶應義塾大学というなかで、私たちはキャンパスの枠を越えて自分の知を追究することができる。

今回の特集は、普段はSFCに通っている学生が、自らの意志でキャンパスの壁を越えて学問を追究していくさまを特集する。

自分の学びたい分野を、SFCという場所から飛び出して深めていくモチベーションや考えはどういったものなのか。実際に外へ出て勉強してみて感じる、SFCの可能性を考える。

特集1

- p4 分野を越えるということ 富田勝教授
- p7 鶴岡タウンキャンパス紹介 荒川和晴特任准教授
増田貴宏
- p9 三田で学んでいる学生鼎談
猿田真一郎 × 石橋里紗 × 新居真夏
- p11 メディアコミュニケーション研究所の紹介 及川元太
- p12 海外で学ぶSFC生鼎談
井川英利奈 × 石田桃子 × 山本哲矢
- p15 寄稿 長谷部葉子准教授



信濃町キャンパス

医学部、看護医療学部 (3年生)
医学研究科

日吉キャンパス

経済学部・法学部・商学部・理工学部の1,2年生
文学部・医学部・薬学部の1年生
経営管理研究科、システムデザイン・マネジメント研究科、
メディアデザイン研究科

矢上キャンパス

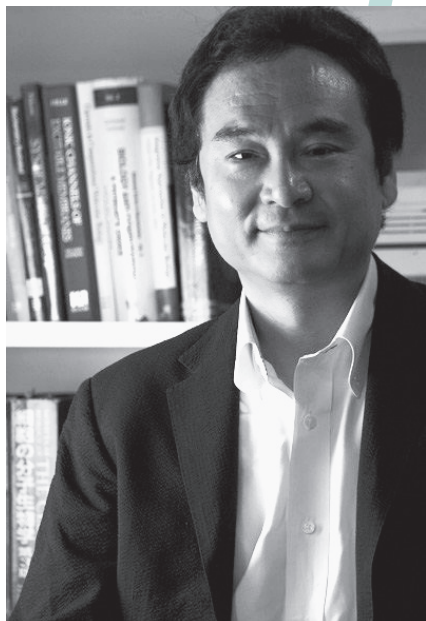
理工学部、理工学研究科

湘南藤沢キャンパス

総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部 (1,2,4年生)
政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科

分野を 越えるようになりたい

SFCのバイオ分野を牽引し、先端生命科学研究所（鶴岡タウンキャンパス）の所長でもある富田教授。
意外だと思われるかもしれないが、学生のころは人工知能を学び、現在の専門である生命システムを学びはじめたのはSFCの助教役になってからだ。分野を越えて学び続ける姿勢について語ってもらった。



富田 勝（とみた・まさる）

環境情報学部教授

専門は先端生命科学、システム生物学

—— どういう出来事を経て分野を横断されたのでしょうか。

大学生のころはインベーダーゲームがとて得意でした。当時、東京六大学スペースインベーダーゲーム大会に慶應大学代表選手として出場したほどです。こんなおもしろいゲームがコンピュータでつくれると知ったときは感動しましたね。それからというもの、自分でApple IIという初期のパソコンを買ってきて英語のマニュアルを読み、プログラミングの勉強をして、自分でゲームをつくるようになりました。

僕は子どものころから将棋が得意だったから、コンピュータ将棋をつくろうと思いました。でもコンピュータ将棋のような人間と対戦するゲームを作成することはとても難しい。人間に勝とうと思ってプログラムを組んでも、人間の知能は本当にうまくできているから勝てないんです。というのも、コンピュータは全通りを網羅的に考えることは得意だけど、人間のようにたくさんある選択肢のなかから直感的にひとつ

を選ぶ、ということが苦手です。

そこで、研究室の先生に相談したら、「人工知能という分野があるから、それを研究してみたらどうか」と言われました。しかし当時の日本には、人工知能の研究をやっている大学がどこにもありませんでした。そこでその当時から人工知能研究が盛んだったアメリカに留学して、自然言語理解や自動翻訳を研究しました。しかしこれがまた難しいんですよ。自動翻訳は基本的に直訳しかできないので、ちょっとした意識やシャレや比喻は、まったくお手上げなわけです。

そのころ、ヒトゲノム計画という言葉が新聞の記事に出るようになりました。それはヒトの設計図にあたるDNAの情報、つまりゲノム情報を解読する計画です。ヒトはもとも一個の細胞で、それが分裂を繰り返して約六十兆個の細胞で構成される個体になる。その六十兆個の細胞のある一部が神経細胞や脳になって高度な知能を持つわけです。驚くべきことにそれは半自動的に形成されるんです。

こんな複雑なシステムの設計図がおよそ三十億文字で書かれていて、情報量にしてわずか一ギガバイトしかない。私はそれを知って、ヒトの知的システムが半自動的に形成されているという事実を目をつぶって、人工知能の研究をするのはおかしいのではないか、と思うようになりました。

二〇〇三年にヒトゲノムは解読されたのですが、あくまで文字列が同定されたにすぎず、それらの意味を理解しなければいけません。設計図に基づいてヒトという生物を理解するという研究のスタート地点でした。三十億文字の暗号文を解析し、それをきちんと理解するにはどう考えてもコンピューターが必要不可欠です。そこに、今まで自分が研究していた自然言語処理が役立つと思いました。本格的にバイオの勉強しようかと決意したのはこのころです。僕はそのとき、アメリカの大学でコンピューターサイエンスの助教として、人工知能の授業を担当していました。アメリカの大学では、教員が別の学部の授業を学生として履

修することができます。その制度を利用して、生物学科の一年生のための Introduction to Modern Biology という授業を履修してみました。

その授業の初回到先生が、「生物学者には二通りある」と言うのです。古典的な生物学者は「生物は複雑で多様で例外だらけだ」と言う。「一方先端的な生物学者は「生物は複雑で多様で例外だらけのように見えるけれども、根本的なところは皆同じだ」と言う。僕はこれを聞いてしびれましたね。確かにDNAの構造は、その並び順が違うだけで、ゲノムの情報をどう呼び戻すのかという法則などは大腸菌もマウスもヒトもみんな共通です。僕はそこに生命の本質があるのだと知り、生命科学にハマりはじめたんです。学生時代は勉強が嫌いだったので、あんなに勉強が楽しいと思つたことはありませんでした。ゲームに熱中している子どもが攻略本を読んでいるような感覚でした。

SFCに情報処理の教員として着任した後、医学部の大学院に分子生物学の講座があることを知ってそ

こで本格的に勉強したいと思いましたが。一九九四年、新しい分野をゼロから勉強するので、当分研究業績はでないけれどそれでもいいですかと

相磯秀夫先生(元環境情報学部長)におそるおそる相談すると、「しばらく論文が出ないとかケチなことを言うな」と背中を押してくださいました。そういう後押しもあつて思う存分勉強できたし、研究会のテーマも、二つもつているうちの一つをすぐに生命科学にしました。相磯先生をはじめとして周りの人が応援してくれたので、「SFCでは新規分野にチャレンジすることを歓迎してくれるんだ」とすごく楽しい気持ちになつたのを覚えています。

そういう経歴があるから、あなたの専門はなんですかって聞かれると表現するのが難しいですね。システムバイオロジーという表現では分かりにくい部分もあるので、生命科学で言うことが多いかな。

——富田教授は先端生命科学研究所の所長でもありますよね。

塾長から所長に任命された当時僕は四十二歳で、山形県には縁もゆかりもなかったから本当にどうなるかと思いましたが。でもこれはチャンスだと前向きに捉えて、徹底してSFCスピリットを通しました。研究は楽しくなきやだめだとか、教授が学生にあれこれ指示をだしているようではだめだとかね。

日本を支えるような人の多くは、大学時代に指導教員からあれこれ指導されていなくて、良い意味で自由奔放に研究していた人なんですよね。やっぱり自分がおもしろいと思つたことを追究するから勉強するモチベーションが上がりますし、教員からいちいち指導されるのに慣れてしまうと成長しないですよ。そのことを一人でも多くのSFC生に伝えたいと思つています。

SFCにおける一番の屈辱は、「普通」と言われることだと思つてんですよ。「君、それ普通だね」って言われたら、世の中では六十点ぐらいだ

としても、SFCではゼロ点です。普通のことをやるならSFCに来る必要はない。「普通」を脱却するためには、他の人がやっていないことや考えつかないことを考えることが必要です。人と違うことに果敢にチャレンジすることが必ず成功するとは限らないですが、そもそもチャレンジをしなければ絶対成功しません。

今の日本で必要なことは、リスクを取ってチャレンジする人たちを増やすことだと思います。チャレンジする人材を育てるのが本来の慶應義塾の役割ですが、そのなかでも一番慶應らしいのがSFCだと思いますね。だから僕は、SFCだけでなく、鶴岡キャンパスでもその役割を貫いています。

——学生たちへのメッセージをお願いします。

なにかを勉強するのにSFCは十分な環境があります。だけど、プロジェクトをやるときに、SFCだけではカバーしきれないケースも多々

ある。そういうときは、〇〇大学の〇〇先生に話を聞いてみたらどうだ、といったアドバイスをするときがあります。学生自身が会いたい人がいれば会ってもらえるように紹介するし、先方が歓迎してくれるようなら、しばらくその研究室で修行させてもらってもいいと思いますね。

それはまさにSFCの理念なんです。相磯先生がおっしゃった、「SFCはネットワーク型のキャンパスだから、別にSFC生だからといってSFCにいなくてはいけないというのは時代遅れだよ。必要に応じていろいろなところに行けばいいじゃないか」という言葉を今でも覚えています。本当にその通りだなと思いますね。

ただ、他キャンパスに行くことや留学することはあくまで「手段」であり、それ自体が「目的」になってしまうのは少し違うかなと思います。僕がアメリカに行った理由は日本で人工知能をやっていた大学がなかったからです。ゲノムの研究をするのに医学研究科に行ったのも、S

FCにはない「分子生物学」をやっている教授がいたからです。まあ目的なしに留学することも悪くはないと思いますが、明確な目的を持って留学すると、数々の苦難にも耐えられるかと思います。

「分野の融合」とか「学際研究」とかよく言われますが、それらもあくまでも「手段」なわけで、学際研究をすること自体が目的になっちゃうとおかしい。たしかに斬新な研究成果は学際的な研究から生まれることが多いですが、斬新なアイデアを求めた結果として学際的な研究をやっていた、という順番になるべきです。したがってSFCなんだからもつと学際的なことをやろうよというように、学際研究が目的になるのはおかしいと思う。結果的に学際的なものが必要になってくるんだと思いますね。



先端生命科学研究所
(鶴岡タウンキャンパス)

2

鶴岡が世界をリードしていく場へ

鶴岡タウンキャンパス紹介①
荒川和晴特任教授インタビュー

— SFCではどのようなことを学んでいたのですか。

高校生のころから宗教や哲学に興味があつて、「生きてるってなんだろう」といったことを考えていました。そのときに、生命を理解するには生き物を「つくれる」方がいいんだらうなと思ひ、生き物をつくりたいなと思うようになりました。

そんなときに、富田さん（富田勝環境情報学部教授）がコンピュータ上で細胞をシミュレーションしているというのを知りました。生き物をつくっているということに近いかなと思つて、SFCでは学部生時代から修士課程、博士課程までずっと富田さんの研究室にいました。生命とは何かという高校のころからの疑問をコンピュータ上で考えてきました。それが

— 今の研究につながっています。

— 具体的にどのような研究をなさっているのですか。

主に二つの研究を鶴岡タウンキャンパス（TTCK）とSFCで研究しています。一つめはクマムシという生き物の研究です。クマムシは宇宙間に飛ばしても生きていられることから、最強の生物として知られています。さらにおもしろいのは、一旦生命活動を止めることができるという性質があることです。水がなくなると干涸びてミイラのようになり、水をかけると元に戻る。つまり、生きていることを止めて、「物」の状態と「生き物」の状態を行ったり来たりできるんですね。この動態を詳しく解析してコンピュータ上でシミュレーションができるようにな

れば、生命活動という動的な現象が何なのかということ数学的な言葉で定義づけられると思つています。

もう一つは、Spiber株式会社と連携してクモの糸を研究しています。クモの糸はタンパク質の素材です。糸というと服など繊維質のものを想像されると思いますが、クモの糸はどちらかというとプラスチックのような何でもつくれる素材です。そこで、世界中からクモを集めてきて解析し、どんな環境にも対応できる強いクモの糸のデザイン原理を探っています。

— 鶴岡タウンキャンパスは学生たちにとってどのような場所でしょうか。

生物を研究するには最高の環境です。最新の設備がこれでもかというぐらい揃つていますし、余裕をもつてのびのびと研究をすることが出来ます。

SFCにはバイオキャンパスという、SFC生が一年間鶴岡へ来て、朝から晩まで実験に取り組むプロ

ラムがあります。先端生命科学研究会だけでなく、SFC生なら基本的に参加することができるので、生物に興味があればぜひ参加してほしいと思います。

また、キャンパスのある鶴岡市に革新的なことをやる人がたくさん集まってくるといいですね。日本では東京発のものばかりもてはやされる傾向がありますが、それではおもしろくないし多様性もなくなつてしまふでしょう。豊かな自然と文化のある鶴岡市が世界をリードする場所になっていけばいいなと思ひます。



荒川 和晴（あらかわ・かずはる）
政策・メディア研究科特任准教授

写真前列中央

SFCでバイオを研究すること

鶴岡タウンキャンパス紹介②
増田貴宏さんインタビュー

——バイオについて研究をしようと思っただけではなぜでしょうか。

僕は内部の慶應義塾高校の出身なのですが、高校三年生の夏休みくらいまではずっと理工学部に進学しようと思っていました。正直SFCもバイオの研究も選択肢にすら入っていませんでした。しかし高校三年生のときに、SFCに進学した部活の先輩と話したことがきっかけでSFCに興味を持つようになり、そのときにバイオを研究している富田勝先生（環境情報学部教授）の研究会のことも知りました。理工学部に進みたかった僕は、もともとバイ

オに興味があり、「健康や医療につながるような研究をしたいなあ」という漠然とした思いをもっていたため、富田研究会でやっている研究はとても魅力的に感じました。

進路選択の際にはやはりとても迷いましたが、学部の一年生から研究をはじめることができ、自分のやりたい研究のために必要なことを自ら学んで行くというSFCの教育方針にとっても共感したため、SFCでバイオの研究をすることに決めました。一年生で研究をはじめた時には、生命科学の知識や論文を読むための英語力など問題が山積みでしたが、SFCだからこそ楽しく研究を進められたのだと思います。

——今はどういう研究をされているのですか。

人の腸内には千種百兆匹を超える腸内細菌が共生していて、人の健康状態に大きく影響を与えています。菌が人に及ぼす影響を考えるには、どんな菌がどれくらいの数いて、どんな物質をつくっているのかが重要になります。そこで僕たちは腸内に共生している菌の種類と数を調べるメタゲノム解析という手法と、菌が作っている物質とその量を調べるメタボローム解析という手法を組み合わせて用いて、人と腸内細菌が互いにどんな影響を及ぼしあいながら共生しているのかを研究しています。また腸内細菌は食事の影響を強く受けて、良くも悪くも変化することが知られています。そこで将来的には、腸内環境を良くすることのできる食べ物やその成分を調べることで、人々の健康に役立つような研究をしていきたいと考えています。

——鶴岡はどこなところですか。

僕は大学二年生の一年間を鶴岡タウンキャンパスで生活したのですが、とても住みやすくすばらしい街でした。SFC生にはとても田舎

だというイメージをもたれがちですが、実は鶴岡市は山形県で二、三位を争う大きな街なんです。デパート等の都会的な部分ももちろんありますが、周囲には都会には少ない自然が多くあるので、とても住んでいて気持ちがいいです。休日には研究会のみんなで山登りに行ったり、海に釣りに行ったりしますし、冬には近くのスキー場で遊んだりもできます。もちろん研究するための環境もとても充実していて、実習の授業や自分の研究を通して、他では決して学ぶことのできない貴重な経験をすることができました。自然の多くある鶴岡でのびのびと研究ができるからこそ、多くの研究成果が残せているのだと思います。



増田 貴宏（ますだ・たかひろ）
環境情報学部3年

三田で学んでいる学生鼎談

SFCに通いながら三田キャンパスでも自分の学びたい分野を追究している学生たちがいる。彼らは何のために三田キャンパスへ通い、何を得ているのだろうか。また、SFCと比較してどう感じているのか。彼らの思いを語ってもらった。



猿田 真一郎 (さるた・しんいちろう)
総合政策学部4年



石橋 里紗 (いしばし・りさ)
環境情報学部3年



新居 真夏 (あらい・まな)
環境情報学部2年

—それぞれ三田キャンパス(以下、三田)でどのような授業を受けているのかを教えてください。

新居真夏(以下、新居)

三田では英文学や考古学などの授業と芸員の資格を取るための授業をとっています。芸員の資格は三田でないと取れないので、ほとんどが文学部生のなかで受けています。もともと人の考え方や心理に興味があつて、SFCでは認知科学などの授業を取っています。

石橋里紗(以下、石橋)

一年生のころからSFCでは経済学やマスコミ系の授業を取っていました。三田では国際経済を勉強したくて、商学部の授業を受けています。SFCはよくも悪くも浅く広く勉強ができるキャンパスですが、三田ではもつと細かく、専門分野として学べるところが良いと思っています。放送研究会という、日吉に拠点を置いているサークルにも所属しています。

猿田真一郎(以下、猿田)

僕は商学部の授業を中心に取っていて、商学部の齋藤通貴研究会とマーケティング系の授業を履修しています。消費者行動論という分野を中心に勉強していて、消費者がどういう心理や環境のもとでどのような商品を購入しているのかということを学術的に学んでいます。

—三田の印象はどうか。

新居 英米文学の授業ではシェイクスピアについて学んでいるのですが、その授業で同じ分野を学んでいる人たちの発表を聞けて、とても興味深いです。SFCの授業は異なる分野を学んでいる人がたくさんいます。それはそれで楽しいのですが、やはり自分と同じ分野を学んでいる人の話を聞けるのも刺激になります。

石橋 三田とSFCの授業形態の違いがおもしろいと思います。私はずっと同じことをするのが苦手なタイプなので、異なる環境で勉強をす

ると刺激を受けます。ひとつのプロジェクトを立ち上げるためにはいろいろな分野を学ぶことができるSFCが向いていると思いますが、一つのことを深く勉強したいと思うなら三田の方がいい環境なのかもしれないですね。

猿田 SFCの授業についていろいろ分野があるんだけど浅い。マーケティング分野にしても、SFCには「マーケティング分野にしても、SFCには「マーケティング戦略」という授業しかありません。三田ではマーケティングのなかでも「消費者行動論」や「流通論」など、いろいろなアプローチで深く学ぶことができるので魅力的です。一方、三田の弱点としてSFCのような伸びやかさというのがない。授業中にディスカッションの時間がないし、教授とのコミュニケーションもあまりないと思います。

——わざわざ三田へ行く理由はなんでしょう。

猿田 僕がまず三田のゼミに入ろうと思ったきっかけは、二年生のとき

にSFCで今後二年間楽しく学ぶ自信がなかったからでした。また、SFCの環境だけでは井の中の蛙になってしまおうと思っていて、単に勉強するためではなくて、自分の視野を広げるという意味でも三田に行こうと考えました。

新居 SFCで何かに四年間熱中することが出来る人はすごいと思います。私はそれをいまいち見つけきれなくて三田に探しに通っている感じです。SFCでは自分のやりたいことをちゃんと決めないと、すべてが浅く学んだだけになってしまおう。

猿田 特にSFCは人文学系の授業が少なくないと思いますね。このままで足りないと感じる人が他のキャンパスへ学びに行く印象があります。

石橋 一年生のころから日吉のサークルに入っていたので、SFCに限らず他の慶應のキャンパス全てを活用したいという気持ちがありました。SFCのなかだけで学生生活を

を終わらせる気はなかったので、いろいろな所を点々として自分の大学生活をカスタマイズしようと思っています。だから三田に通うということに特別な意識があるわけではないですね。

——三田に通ってみて、SFCのよさや弱さなどは感じましたか？

石橋 SFCの世界って狭いですよね。キャンパスを歩いていても必ず友達に会います。

新居 私は人見知りなので、逆にそういう環境にストレスを感じたりします(笑)。

石橋 SFCの授業が学生任せなのはよいところだと思います。私はSFCだけでは足りないと思います。同時に自由も求めているので結局SFCの校風に落ち着くのかもしれません。

新居 ふとしたときにまったく異なる分野の人の意見を聞けるのはとて

も楽しいですよ。両キャンパスで授業を受けていることで、三田では一つの分野を深く追究できるとともに、SFCの学びで視野が広がります。

猿田 結局はSFCでも三田でも同じことで、自分で「この学びが足りない」って認識できた時点で行動に移せばいいんです。うまくキャンパスを使いこなすことが大事だと思います。

石橋 SFCで四年間を過ごさなければいけないという堅い意識を持たなくてもいいんじゃないでしょうか。

新居 三田の授業を取れると知ったとき「じゃあ取れるなら取ってみないな」と純粹に興味が湧きました。三田という外の世界に出てみて、そこから何が見えるのか試してみようと思っていました。せっかく他のキャンパスで学ぶことが許されている環境なので、深く考えずに一歩踏み出してみるのもおもしろいですよね。

メディアコミュニケーション 研究所の紹介

三田キャンパスにはメディアコミュニケーション研究所という機関がある。ここでは、広告やジャーナリズムなどのマスメディアに関心のある学生たちが学部関係なく集まっている。SFCからメディアコムへ通っている及川元太さんにメディアコムの紹介と魅力を聞いた。

——メディアコミュニケーション研究所（以下、メディアコム）について教えてください。

メディアコムはマスメディア、ジャーナリズムなどを中心とした研究会や特別授業を受けることができる研究所です。メディアコムに設置された授業は法学部政治学科や文学部の学生は法学部の単位として履修することができるのですが、他の学部生が履修する場合は卒業単位には含まれません。

授業はメディア論に関するものがほとんどです。基礎科目（オープン科目）と呼ばれるものは他学部の授業として開かれているものも多く、メディアコム以外の学生でも履修す

ることができません。一方で特殊研究

と基礎演習は、メディアコム生でない」と受けられない授業で、専門性がありとても楽しいです。僕は「広告特殊講義」という授業を受けたのですが、広告業界で働いている方から直接教えてもらうことができ、有意義でした。

このような講義の他に多くの研究会が開かれています。僕は慶應義塾福澤研究センターの准教授でもある都倉武之先生が開くゼミで日本近代史も学んでいます。

——多様な研究会があるんですね。

はい。メディアコムは元々新聞研究所とよばれていて、新聞やマスコ

ミにたくさんの人材を送り出してきました。僕は特にコミュニケーションの研究をたくてメディアコムに入りましたが、メディア論以外の研究会もあることに驚きました。SFCでは脇田玲先生（環境情報学部教授）の研究会に入っていて、非言語コミュニケーションを拡張できるデータベースをつくっています。

——メディアコムの印象はどうですか。

修了するにはSFCの授業以外で二十八単位も取得しなければならぬですし、卒業単位としては認められません。だからメディアコムに入るにはそれなりの覚悟を要しますし、通うことになっても修了するSFC生は少ないです。それでも僕が通い続けられるのは、やはり楽しいからです。

広告やメディアがとても人気な業種ということもあり、メディアコムの入所倍率は十倍近くになります。どれだけ楽しんで活用できるかが大事だと思います。

——わざわざ三田キャンパスまで行く意味ってなんでしょう。

SFCの学生って、やっぱりSFCのことが好きなんですよね。僻地に通っていることに引け目を感じている人は少ないと思うんです。

SFCの学生がわざわざ三田キャンパスに通うのは、SFCが嫌いというわけではなく、異なる環境に身を置いてみたいという好奇心がモチベーションになってきている気がします。僕も最初は三田キャンパスってどんなところなんだろうっていう純粹な興味から通うようになりました。理由が何であるにせよ、大切なのはただ自分が能動的に楽しめるかどうかだと思いますね。



及川 元太（おいかわ・げんた）
環境情報学部4年

海外で学ぶSFC生鼎談

奥田敦研究会でアラブの学生と一緒にさまざまな活動をしている井川英利奈さん（総合政策学部4年）、長谷部葉子研究会でコンゴプロジェクトに参加している石田桃子さん（総合政策学部4年）、小林博人研究会で発展途上国の仮設住宅建設に関わっている山本哲矢さん（環境情報学部3年）の三人に「フィールドを越えて学ぶ意味」について語ってもらった。



山本 哲矢
（やまもと・てつや）
環境情報学部3年
小林博人研究会所属

石田 桃子
（いしだ・ももこ）
総合政策学部4年
長谷部葉子研究会所属

井川 英利奈
（いかわ・えりな）
総合政策学部4年
奥田敦研究会所属

—みなさん、どのような活動をされているのですか。

石田桃子（以下、石田）

現在、長谷部葉子研究会で、アフリカのコンゴ民主共和国に小学校を建設運営するというプロジェクトを行っています。そもそもそのきっかけは、SFCの英語教員でコンゴ出身のサイモン・ペデロ先生が教育を通して母国に恩返ししたいという想い

でした。そこで教育と建築の合同プロジェクトとして立ち上げ、さらに医学と看護も加わって、質の高い持続可能な学校づくりを目標に、教育、建築、医療の三本柱でプロジェクトを進めています。私の所属する教育チームは小学校の自立運営を目指しているのですが、そのなかでたとえば学用品不足という問題に直面しました。そこで、私たちの帰国後も子どもたちが自分たちでチョークをつくれるように、つくり方を教えるといった活動もしています。

そのため、私たちは渡航前に日本のチョーク工場で研修をさせていただき、学んだ技術を現地の子どもた

ちに伝えていきます。今年度は

チョークマシンを使って実際に

チョークをつくったり、質の高い日本のチョークを近隣の小学校に売って、その収益で小学校の奨学金や学校の運営費をまかない、自立運営の仕組みをつくる取り組みをしています。

当初は日本人が来るということが珍しく、好奇の目にさらされてきました。しかし、年々と続いていくうちに、「あそこは日本人が建てた学校」と見てくれるようになり、関係性がよくなってきました。そのようなこともあつて、今では現地の学校の先生が機材などを管理してくださっています。

研究会のプロジェクトとして夏に一回のフィールドワーク、また希望者は春に一度コンゴへ行く機会があります。



井川英利奈（以下、井川）

奥田敦研究会で、複数のプロジェクトを行っています。私が関わっているのは主に二つあります。一つはASPというもので、日本語を学ぶアラブ人学生を約二週間日本に招聘し、アラビア語を学ぶSFC生とさまざまな活動を行う学術交流プログラムです。例年アラブ人学生と本に関するレポート作成を行っており、昨年度は日本のIT事情や日本人の忍耐精神、日本語の美しさについて研究する学生や、日本における男女の役割に関して研究している学生がいました。

ASPに参加した学生には、自国に帰国した後もその国の日本語学校で学び続けたり、さまざまな機会を利用して日本へ再度留学する方もいます。なので、彼らにとってASPが大きなきっかけになっているのだなと身にしみて感じています。

二つめの活動として、「ハヤト」という実際の生活レベルの



イスラームについて記事にしたフリーペーパーを発行しています。

山本哲矢（以下、山本）

小林博人研究会でベニヤハウスプロジェクトというものに取り組んでいて、主に発展途上国の被災地における仮設建築に関わっています。発展途上国の被災地では本当に何も手に入らないんです。日本の被災地のように仮設住宅が分配されるということもないですし、支援してもらえるのは気持ち程度のわずかな建材と食糧です。そもそも発展途上国は建築の技術もあまり発達しておらず、専門のカーペンターも不足しています。日本で使うようなクレインもありません。

そのような地域で、わかりやすく例えるならIKEAの家具のようなコンパクトにパッケージ化された部品と説明書が日本から届き、それを自分たちだけで組み立てられたら、従来に比べて短期間で住空間を提供することができそうです。被災直後の人材不足のなか、プロの手がなくても自分たちだけで仮設住宅をつくるこ

とができたら理想的ではないか、ということを考えながらこのプロジェクトは行われています。僕自身は二〇一四年の八月にはじまったフィリピンの幼稚園建設プロジェクトから参加しています。この五週間滞在しました。五週間ともなると、現地の人との関係性も深まります。実際に建物が建ったとき、現地のフィリピン人がお酒を呑みながらとても喜んでいましたよ。現地の人々の思想や生活に触れ、一緒に施工し、完成した建物に住んでもらい、喜ぶ顔を見届けることができ初めて、やってよかったなと思いましたね。

支援といいながら箱だけをつくって帰国してしまうというのは、正直支援になっていないのではないかと僕は思います。現地の人自分たちの手でつくれば、その箱の中の空間は本当に落ち着くものになるんだと



実感しました。

—— 現地の方との関係性がつくられていくというのはフィールドワークならではのですね。

石田

それが一番大きいですよ。私たちのプロジェクトの理念として掲げているのは「協働」という言葉なんです。これは「支援」とは異なります。従来の「支援」だと箱ものだけつくって、使い方も伝えずに帰国してしまう。そうすると結局、持続可能なものにはならないですよ。そうではなく、日本人の価値観と現地の人々の価値観をコラボレートしようよというのが私たちの考え方なので、そこに上下関係はないんです。長谷部研のメンバーは関係性を構築していくことを基盤に「協働」することを大事にしています。

井川

お話していて、私たちそれぞれの研究会に「協働」という考え方が共通しているのだなと思いました。と

もすれば宗教や人種の違いというのが目につきがちではあるんですが、単に違いを知ることにとどまるのではなく、まず同じ人間、同じ学生同士としてともに学び、意見を交わすなかで、互いに影響し合いお互いが変わっていくことが大切である、という考えが奥田研では根底にあります。

山本

日本での常識が海外では通用しないことはよくありますね。そもそもその考え方の相違もあります。僕自身もそのような経験がありました。

現地で送迎をお願いしていたのですが、運転手さんが時間どおりに来なかったことがありました。「どうして」って聞くと子どものバスデープレゼントを買おうとしていたとか、妻の具合が悪いんだとか家庭の事情を持ち出すんですね。

日本であれば当然やってくれているだろうな、という見込みが通用しないことがあって、そうすると一度「なんでだろう」と反芻させられます。現地の方とコミュニケーション

をとる機会を重ねることで、自分自身を考え直すきっかけを得ているような気がしますね。そういったことから学びを得ています。

石田

自分たちが現地の人たちのためになにかをしようと思ってフィールドに出ても、結局一番学んでいるのは自分たちなんですよ。

——フィールドでの学びから得られるものは何でしょうか。

山本

僕は建築を学んでいるので、どうしても教室というフィールドのなかだけでは完結できない部分があります。必然的にフィールドに出て行く必要性が生じます。学外で建物を建てて、実際に使っているところを見てはじめて建築を学んでいると言うことができるし、そのことに僕自身は喜びを感じています。また、フィールドを越えて活動することによって、自分の能力や自分自身のことを知ることができると感じています。

井川

どの国でもそうですが、自分が現地へ足を運んで初めてわかることってやっぱりあるんです。普段報道で知ることのできない現地の方の人となりもその一つです。

また、フィールドワークによって自分の限界を取り払えるような気がします。現地の学生と密接に関わっていく過程は、正直に言えばいいことだけでなく、精神的にも肉体的にもハードなことが多いです。その上、言語の壁もあります。けれどもそのような挫折を経験するからこそ、人との繋がりがプロジェクトのやりがいも実感できます。

山本さんと似ているのですが、海外へ行くことで自分の価値観が広がります。日本で暮らしていて当たり前だと感じていることが、現地に行くとそうではないんですね。海外でいろいろな方と話すと、自分の考えの浅さを痛感したり悩んだりしますが、一度そのような経験をすると自分のことも相手のことも大切にできるたおやかな人間になることができるかと考えています。

石田

そうですね。井川さんと同じく私もそれが一番大きい学びかもしれないと思つています。フィールドワークにおいて重要なことは、そこにいる現地の人といかに関係性をつくっていけるかということだと思います。それができないと、活動自体も効果的なものになりません。

また、日本でこういうのいいよねって準備して持つて行ったとしても、結局現地の方が気に入って使わないと、続かないですよ。現地の人にとって何が生活の糧になるのか、何を優先順位にして生きているのか、そういう文化的な考え方は実際に現地に足を運んで自分の目で確かめないとわからないです。

「同質性」から 異言語・異文化を発見し、 コミュニケーションする面白さ

寄稿 長谷部葉子准教授

みなさんは、異言語異文化コミュニケーションというのをイメージするでしょうか。一般的には、海外を対象としたコミュニケーションであると思われるのですが、実は、これは日常的に、身近に、誰でも経験しているものです。例えば、友人と大根のみそ汁の話をしていて「おいしいよね」と共感し、いざ友人の家へ行ってみそ汁をごちそうになると、自分のイメージしているみそ汁とは、みそも具材の切り方もかけ離れていて、当惑するなんてことがあると思います。

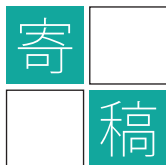
何を言いたいかというと、異言語異文化とは、生まれ育った家庭、地域、その風土が異なれば、そして受けてきた教育、さらには専門分野が異なれば、隣人としても、親友としても、誰とでも、日常的に存在しているということなのです。ただ、日本という国で、日本人社会という一括りの中で生きていくと、すべて「同質」であるという思い込みから、このようなズレを「異言語・異文化」と意識、いや認識していません。

例えば表題にある、「コミュニケーション」、「コラボレーション」というありふれた言葉でも、この言葉をもとに同意しても、各自が頭の中でイメージしている解釈は、意外に多様性があり、異なるものですが、その言葉の解釈まで掘り下げることもなく、その「異質性」に気がつかないのです。しかしいざその違いがわかると、「同質」であると思いがわいているが故に、「わからない」、「専門分野が異なるから」と割り切り、放置してしまうことが多い。これでは、「違い」を発見した、あるいは「文化摩擦」に遭遇したチャンスを生かすこともなく、それ以上の理解、発見、共感が生み出せません。そして何よりもコラボレーションが生まれません。こんな残念なことがあるのでしょうか。



長谷部 葉子
(はせべ・ようこ)

環境情報学部准教授
専門は英語教授法、カリキュラムデザイン
異言語・異文化間コミュニケーション



秋祭の場でSFC25回目の 誕生日を楽しく祝おう！

「ついこの前、20周年を祝ったばかりだよな」

「あれから5年しか経ってないのに、わざわざ25周年の祝賀行事をする必要あるのかな？」

「まあ、誕生日を祝うのは当たり前のことだから、みんなで楽しく祝えばそれでいいんじゃない」

こんな会話から25周年記念事業実行委員会の企画がスタートしました。

楽しい中にも、どうせなら皆が「やって良かった」と思える企画にしたいよねと、3つの目標を決めました。

- 1) 学生、卒業生、地元の皆さん、教職員、OB・OG教職員らのつながりが深まること
- 2) 「未来創造塾」のスタートを祝い広く発信すること
- 3) これまでの25年の歩みを共有して、次の飛躍につなげること

これらを達成するために、秋祭と融合した祝賀行事を10月10日に開催することにしました。秋祭は学生が企画する学生の行事です。今も昔も、SFC一番の魅力は輝く学生たち。その勇姿を式典に参列する国内外の多くのお客様に見ただけの絶好のチャンスです。地元遠藤の皆さんも餅つきや太鼓で、お祝いを盛り上げてくださいます。さらに今回、学生と地元の方が話をする中で、遠藤地区の御神輿を学生と地元住民と一緒に担ごうなんて粋な企画も生まれそうです。

一方、未来創造塾もいよいよ幕が切って落とされます。学生が主体となってつくるStudents-Build Campus (SBC) は、他に例を見ないオンリーワンの試みでしょう。思えば、四半世紀前、学生と教職員が一丸となって、何もなかったところからSFCをつくり上げました。今、喧々譁々議論しているシーンは、新しいキャンパスをつくろうと燃えていた当時の様子と重なります。10月10日は、SBCの最初の一棟の上棟式を、皆で祝うことになっています。

人間で25歳と言えば、やっと一人前に仕事ができるようになってきて、これから社会に貢献するという年頃でしょうか。1990年に開設されたSFCから巣立っていった卒業生たちは働き盛りの40代を筆頭に、社会で頭角を現し、旋風を巻き起こしている者も多くなります。そんなSFCの宝物である卒業生たちのホームカミングも当日は予定されています。25年の歩みと当時のスピリッツを伝える映像制作や写真展の企画も進行中です。

今このキャンパスで学んでいる学生、羽ばたいていった卒業生、SFCを愛する教職員、地元をはじめ各地のサポーターの皆さんがつながって、SFC25回目の誕生日を楽しくお祝いしましょう。そして、次のSFCの四半世紀を、未来を語り合いましょう。



秋山 美紀

(あきやま・みき)

環境情報学部准教授
SFC25周年記念事業実行委員会
実行委員長を務める。





p16 寄稿 秋山美紀准教授

p18 SFCと地域のつながり

東海林祐子准教授×飯島富士男氏

p20 あのころ 加藤文俊教授

p22 SFCの国際交流 國枝孝弘教授

特集2

SFC 25周年

これまでの

25年と

これから

SFCは今年で25周年をむかえる。25年という年は、SFC第一期生の子ども、まさに第二世代目のSFCがはじまる節目の年といってもいいかもしれない。今までSFCは社会とどのような関係を築き、これからどう発展していくべきなのか。外国の大学やSFCのある遠藤とのつながりを軸に、SFC全体やSFC生の信念を探っていく。



SFCと地域のつながり

今年の秋祭では、25周年イベントのひとつとして、SFCの地元、遠藤地域をはじめとして藤沢市民を対象にした健康・スポーツプログラムが開催される。イベントを担当する東海林祐子先生（政策・メディア研究科准教授）と開設当初からSFCと関わりの深い遠藤地区の飯島富士男さん（慶緑産業代表取締役）のお話から、SFCと地域のこれまでとこれからを考える。



東海林 祐子

（とうかいりん・ゆうこ）

政策・メディア研究科准教授
専門はライフスキルプログラム・コーチング

飯島 富士男

（いいじま・ふじお）

慶緑産業代表取締役

東海林祐子先生（以下、東海林）
飯島さんは昔から地域の窓口として、七夕祭や秋祭に協力いただいています。SFCとは開設当初からの付き合いなんですよ。

飯島富士男さん（以下、飯島）
そうですね。今SFCが立っている土地を持っていたので、その土地を慶應義塾に売却したのがはじまりです。また、会社ではSFCの植栽の仕事を請け負っています。

毎年七月に行われる七夕祭とも第一回からの付き合いです。ある日突然、七夕祭実行委員会（以下、七実）の学生が「地域の方を呼びたいので、ご相談したい」と訪ねて来たんです。それが学園祭との関わりのはじまりでした。

七実の一期生は一生懸命でした。「子どもが来れば大人も来るから、子どもにアピールしたらどうか」と提案したところ、学生たちは遠藤の小学校でピラを配ることにしたんですよ。私が小学校の校長先生と交渉して、七実が全家庭分のピラを小学校に配った。なかなかできないこと

ですよ。

SFCと遠藤の関わりは、七夕祭と毎年十月に行われる秋祭がメインですね。特に七実の学生は代々、竹炭祭り、あじさい祭り、彼岸花祭りと、遠藤のお祭りにも協力してくれています。

開設当初は、学生だけではなく先生方も地域と積極的に関わろうとしていました。学生を連れて遠藤で行われる祭りや浅間神社の祭りに参加したりと、遠藤を知ろうとしています。

東海林

今は教員が学生を連れて祭りに行くという話は聞きませんね。いつのまにか教員と地域の関わりが変化してしまっただけですね。

飯島

そうですね。教員の方だけでなく、学生たちの地域への関心も薄くなっています。SFCのお祭りに必要な資材は、遠藤のさまざまな会社や団体から借りています。昔から借りたところへは挨拶に行っていたんです

が、それが疎かになってきている。借りたものを失くしたり、壊してしまったりということも増えてきています。

そういうことをしていると遠藤での評判が悪くなってしまうし、祭りにも行かなくなる。SFCの祭りは地域のものとしてやっています。が、次第にそうではなくなっている気がします。もともと地域の人を呼べるようなことをやってほしいと思います。

昔は七実の子たちが毎日のように家に来て、夕飯を食べながら祭りの相談をしていました。子どもの家庭教師なんかもやってもらっていましたし、学校の芝に集まってワイワイと語らうこともありました。そういう関わりがあると地域とのつながりが密になって協力したくなりますし、祭りにも行こうという気になりますよ。

東海林

来場者数がどんどん減ってきているのはそういうことが背景にあるのかもしれないですね。せつかく大人と

付きあっているのだから、学生たちには社会人としてのマナーを身につけてほしいですね。

今年の秋祭は二十五周年ということもあり、秋祭実行委員会も地元の子どもたち向けの企画をしたり、遠藤の方向けのスポーツイベントがあつたりと、地域に目が向いてきたのかなと思います。

飯島

最初は規模が小さくても、なにかをはじめれば少しずつ大きくなると思うんですよ。今も年に一回地域の人とSFCとで凧揚げをやっていますが、それも最初は地味にはじまったものでした。それが段々大きくなっていったんです。

それに最近では、お祭りの前にてるてる坊主を吊るす習慣も復活しましたね。あれも昔、七実の学生たちが「雨を降らせたくない」と言うのでやり方を教えたものです。てるてる坊主はまじない道具なので、ちゃんとした吊るし方や吊り方があります。一時期やらなくなっていたのですが、最近またちゃんとしたり方

で吊るすようになっていきますね。ああいうのを見ると、今の学園祭実行委員会の学生たちも祭りを成功させたいんだなと実感します。

東海林

七夕祭にしても秋祭にしても、あつてるてる坊主を見ると「成功させたい」という思いが伝わってきますね。実行委員の学生はもろろん、陰で支えてくださっている飯島さんのような地域の方々の気持ちも伝わってきます。いただいた協賛金や資材のお札に行くことなどは、心の問題でもありますよ。

実行委員会の学生たちだけではありません。学園祭に参加する学生たちにも、SFCのお祭りはいろいろな人たちが頑張つてはじめて開くことができるということが伝わればいいなと思います。

あのことろ

いま、SFCに勤めるひとりの教員として、何か（“地道にコツコツ”と）お祝いしたい。そう思って、昔のキャンパスの写真を片手に、スマホをポケットに入れて、キャンパスを歩いてみることにしました。

「あのことろ」の写真がどこで撮られたのかを確かめながら、「現場」に向かう。それは、ちいさなタイムトラベルのようなものです。いま、自分が立っている場所が、たくさんの人によって踏みしめられてきたことを、あらためて実感します。これからも、のんびりと続けて行くつもりなので、「あのことろ」の写真があったら送ってください。ぼくがその写真を持って、ちいさな旅をします。

© あのことろ <http://thosedays.yaboten.net/>



加藤 文俊

(かとう・ふみとし)

環境情報学部教授

専門はコミュニケーションデザイン





SFCの国際交流

2015年10月に行われるSFC25周年式典には3つの大学、タンペレ工科大学（フィンランド）、ハワイ大学（ハワイ）、北京外国語大学（中国）から来賓をお招きする。そこでこの3つの大学を選んだ経緯とSFCとの関係性について國枝孝弘総合政策学部教授に話を聞いた。

——今回のイベントに招待した三つの大学とはどのような関係を築いてきたのでしょうか。

これまで関係を築いてきたというより、これからSFCのパートナーとして提携を結び、交流を活発にしていきたい大学です。二十五周年という節目の年に、今まで関係を築いてきた海外の大学を招待しようという考え方もあるけれども、今回は未来志向で考えて、これからSFCの国際化推進のために一緒にやってみるようなところを選びました。

この三つの大学を選ぶにあたって、まずは地域的なバランスを考えました。「国際化IIアメリカ」という考えに囚われることなく、世界のさまざまな国や地域とつながりをもとうというところでヨーロッパ、東アジア、太平洋の三つから選んでいます。ヨーロッパからはフィンランドのタンペレ工科大学を選びました。この大学とはこれまでもSFCと連携があったのですが、研究の活発化が期待されているので、関係をより強化しようということでも来ていただく

ことにしました。東アジアからは中国の北京外国語大学を選びました。十月までには総合政策学部との間で協定を結んで、交流を開始しようと考えています。三つ目の太平洋地域のハワイ大学は、村井純先生（環境情報学部長）と土屋大洋先生（政策・メディア研究科教授）の個人的な関係があり、太平洋の中心に位置するこの大学と連携を強化していくことは望ましいと考えました。（※取材時二〇一五年五月）

今回招待する三つの大学はそれぞれに特色があり、さまざまな研究や学生の交流ができると期待しています。

——三つの大学はそれぞれどんな強みを持っていますか。

まずタンペレ工科大学は、IT分野が強みです。しかし、それだけに限らずたとえばビジネスや教育分野などでも研究連携を将来的にはかりたいと考えています。

北京外国語大学には、日本語を勉強している中国人学生がいます。中国で日本語を勉強している大学生

に、SFCでさらに日本語を上達させてほしいと考えています。将来SFCの学生も北京外国語大学に留学できるようにになると望ましいですね。将来的には双方の学生が行き来できるような協定をつくろうとしているところです。

ハワイ大学は、研究や教育でどんなところを工夫して大学のグローバル化を進めているのかといったノウハウを共有しようと考えています。

——海外からの来賓の方々にとどのようなお話をいただくのでしょうか。

まず来賓の方々に、未来へのヴィジョンとそのための実質的な取り組みをお話いただくために、式典の前日に三田キャンパスで国際シンポジウムを行います。

まだ仮のテーマなのですが、「これから私たちはどのような研究や教育の連携ができるだろうか」ということをうかがおうと思っています。具体的には、それぞれ三つの大学がどのように留学生を受け入れたり、授業を構成したり、どのようにして

国際的に通用する組織運営をしているかについてです。それぞれの大学の取り組みを話してもらって知見を寄せ合い、今後の連携に生かすシンポジウムにする予定です。

——これまでの二十五年とこれから二十五年をどのようにお考えでしょうか。

SFCの一期生は今だいたい四十年代になっています。やはり四十歳を超えると、社会のさまざまなところで中心的な役割を担うようになっていきますよね。この二十五年間SFCの卒業生が社会の中心的存在となるまでどんなことをやってきたのか、それを明らかにすることに価値があると思いますね。

次の二十五年を考えると、今が五十周年に向けてどんなことをやっていくべきかの指針を出す時期です。

「国際化」を担当している僕が言えることは、これからの学生たちはSFCだけにとどまらず、もっと流動的に学んでほしいと思っっています。たとえば半年間は他の大学で勉

強してSFCに戻ってきた後、半年経ったらまた違う大学に留学するというような形です。つまり、学ぶ場所をSFCに限定する必要はない。学生や研究者が柔軟かつ簡単に海外へ行けるようなものにしていくことです。SFCが目指す二十五年後の国際化のヴィジョンはそういったものかと思っています。

——國枝先生が考える国際化とは何ですか。

国際化で一番大事なのは、人とのつながりをどのようにつくっていくかということです。幼少期における人とのつながりは家族が中心です。小、中学生ぐらいになるとそれが広がって、友達や先生とのつながりが増える。そのつながりは、まだ優しさや思いやりなど感情的なものだと思っと思っています。

成長していくにつれて、社会、そして世界とのつながりが大きくなる。そうすると感情的な部分だけでなく知性でつながるようになる。というのも世界の人とつながるとき

に、その人たちが一体何をどのように考えているか、きちんと想像して推し量るということは、感情だけではできないことですよね。ですから知性と想像力を同時に働かせることが、国際化を進める上で大切な要素ではないかと思っています。

教育施設における国際化には、いろいろな尺度があると思います。一つ目は留学生の数、二つ目はGIGAプログラムのような制度の充実度、三つ目は学生におけるバックボンの多様性などです。

SFCには一年だけ海外にいたとか、高校生のとき海外に行っていたという学生が五人に一人くらいいるんです。そういう環境だからこそ、SFCで国際化を進めるためには、学生のバックボンの多様性が活かせるような制度を充実させていかなければいけないと考えていますね。

——SFC生には将来どのように生きてほしいと考えていますか。

少なくともSFCで学ぶなら、「将来お金持ちになってやろう」という

ような精神で学んでほしくないと思っっています。

SFCでは社会的な成功を得得るという思いではなく、むしろ社会を変えたり、新しいものを創造したりする、そういう野心を持つてほしいなと思います。



國枝 孝弘
(くにえだ・たかひろ)

総合政策学部教授
専門はフランス文学、
フランス語教育

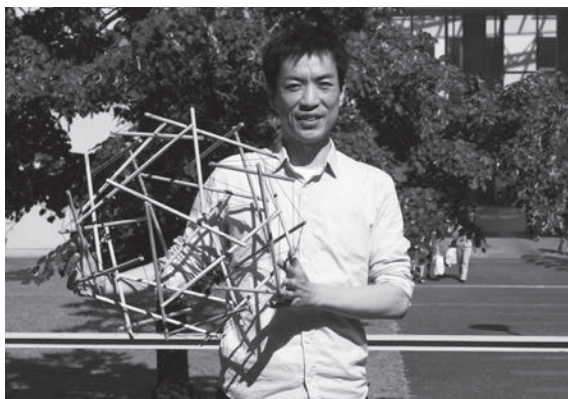
ようこそ、新任教授

毎年、SFCにはさまざまな分野の教員が着任する。新たにSFCにやってきたのはどのような教員だろうか。今号では、オーサグラフというオリジナルの地図を開発し、世界地図図法を専門にしている鳴川肇環境情報学部准教授と、中国近現代史を研究し、今期は子ども史について研究会を開いている鄭浩瀾総合政策学部准教授にお話をうかがった。

鳴川 肇

(なるかわ・はじめ)

政策・メディア研究科准教授
専門は世界地図図法



——ご専門が地図制作とは珍しいですね。

SFCに来る前に「AuthaGraph World Map」(以下、オーサグラフ)という新しい世界地図を開発しました。NTT INTERCOMMUNICATION CENTER や日本科学未来館や東京都写真美術館でオーサグラフに関する展示を行いました。また、ジオグラフィアというブランドで、ペーパークラフトの世界地図や地球儀の商品開発もしています。

いま一般的に使われている地図はメルカトル図法で描かれています。が、実はこの図法は不完全なんです。地球を長方形に収めることができるのですが、大陸の形と面積が歪んでしまうんです。

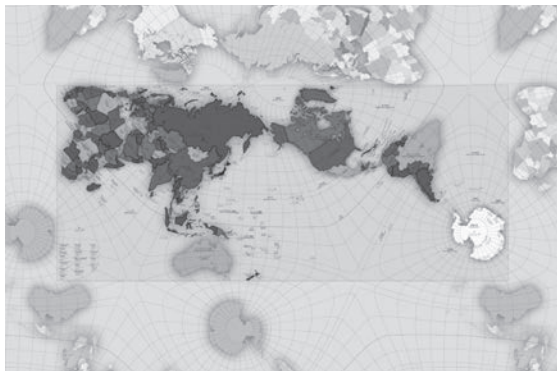
歴史上、この問題を解決しようとした人は何人もいました。私が授業でも紹介しているバックミンスター・フラームその一人で、ダイマクション・マップという新しい地図を考案しています。しかし、ダイマクション・マップは面積比が変わってしまうというメルカトル図法の弱点を克服し

ている一方、長方形に収まらず、地図の輪郭がギザギザになってしまうという別の弱点があるんです。

そこで、どうにか面積比を変えずに長方形の地図をつくれなにかと思いつき、地図の制作をはじめました。

——制作をはじめてから、完成するまでのお話をうかがってもよろしいですか？

少し話が前後しますが、僕は小学生のころ、札幌に住んでいました。札幌の給食に出る牛乳パックは正四面体なんです。飲み終わったあとにパックを膨らまして、踏んでゴミに出すんです。踏むと大体ぐしゃぐしゃに潰れるのですが、あるときいつものように踏むと、綺麗に四角に潰れたんです。そこで、正四面体を潰れと四角なることに気がつきました。些細な発見だったのでずっと忘れていたのですが、地図制作に悩んでいたときに、舐めていた正四面体の餡の包み紙を小学生のころの癖で四角く折りたたんでいて、それを見て「あつこれだ！」と思ったんで



オーサグラフ

す。つまり、地球を正四面体に転写すれば、長方形の地図ができることに気がついたんです。具体的に言うと、まず、球面を九十六個の三角形に等分します。面積を保ったまま正四面体に投影しながら並べ直します。そして、正四面体を切り開いて、長方形にするんです。

僕は実際に手を動かしながら考えるタイプなので、地球儀をハサミと合わせて、上手くないかない箇所を見つけたら、修正してまたつくるとい

う作業を続けました。そうしてできたのが、面積比が正しい長方形の地図、オーサグラフです。

——オーサグラフが完成してから、鳴川先生はさまざまなプロジェクトに参加されていますが、地図をつくる前から計画されていたのでしょうか？

いえ、最初はつくる作業自体が楽しくて地図を制作していました。ですが、完成した後は、この地図でなにをやるかが問題になります。

オーサグラフができたころの僕はまったくの無名だったのですが、友人の紹介で日本科学未来館の学芸員の内田まほろさんと言う方にプレゼンテーションする機会ができました。その方はSFC出身で、オーサグラフをとんでも気にいってくださいました。毛利衛館長にも紹介していただき、未来館とのお付き合いがはじまりました。この地図を用いてオリジナルの世界観がつけられるジオ・パレットというウェブアプリや、ジオ・コスモスという大型地球儀の設計協

力に携わりました。

他にも東京都写真美術館の展示として、世界史年表を地図上で表す「世界史地図・クロノマップ4700」をつくりました。このときは、学研教育出版社やライゾマというインターネットタイプコンテンツの製作に長けたチームと世界史が得意な学生や塾の講師の方々に協力してもらいました。

——地図の制作がご専門というのは珍しいと思います。大学時代から地図の研究をされていたんですか？

大学時代は建築デザインと建築史の勉強をしていました。卒業制作ではアングラ劇（注）の劇場の設計を行いました。その際、無機質な冷たい印象を与えないように、デッサン技術を鍛えました。透視図法（遠近法）を学んで、色鉛筆やパステルを使ってデッサンを習得しました。元々手を動かすのが好きだったので、とても楽しかったです。

その卒業制作は好評で、日本建築家協会が金賞をいただいたのですが、講評会で審査員の一人だった

妹島和世さんに「有機的なデザインに構造的な意味付けがあるともっとよかったのに」と言われたんです。僕自身、構造を理解せずに設計を行うのは不自然だという思いがあり、大学院では建築の構造を学ぶことになりました。

経済的に合理的な梁や柱のモダンな構造も素敵でしたが、当時興味をもったのは、忘れられてしまった昔の構造でした。そういうものも知っていたら、自分ができるデザインの幅が広がると思っただけです。調べていくなかで、フラワーが考えだした幻の構造である「テンセグリティ」（右ページの写真参照）に出会い、この構造について学びました。まずは文献を読むことから勉強をはじめましたが、読書では構造体に流れる力は把握できません。そこで模型をつくり、その模型をつくるためには立体幾何学を学ぶ必要が出てきて必然的に幾何学を学びはじめました。これがのちの地図制作につながるんですね。構造を知るための手段として学びはじめた幾何学ですが、学んでみると別の分野にも応用が効くことに気

がつきました。たとえば、学部生時代に鍛えた遠近法（透視図法）は立体幾何学の集積です。大学院の同級生で、独自の空間表記法を展開して作品をつくっている市川創太さんの影響もあり、透視図法に強く興味を持つようになりました。そこでオランダに留学して、もっと深く幾何学の勉強をすることにしました。

オランダでは、射影幾何学を使って全球写真が撮れる独自のカメラを制作しました。オランダには建築誌の表紙を飾るような近代建築が多数あり、それらを全球写真に収めて普通の写真との違いを比較する活動をしていました。

そういう経験を経て、透視図法の延長線として、世界地図の提案に至りました。世界地図というのは球面を平面に描き写す技術ですから、投影幾何学の成果なんですよ。

——SFCではどのようなことをしたいですか。

「環境情報学」の授業では、学生たちにジオ・パレットでオリジナル

の世界地図をつくる課題を出しています。ジオ・パレットは地図の中心を簡単に替えたり、統計などの情報を元にして国ごとに色を塗ることができるという地図アーカイブです。たとえば、チョコレートが大好きな人だつたら、カカオの生産量や消費量を色の濃淡で示し、ベルギーとスイスを真ん中に置いた世界地図をつくることが出来ます。

そうやってその人だけの地図というのをつくってみると、各々の世界観を絵で表現できるんですね。SFCは学際的なキャンパスでいろいろなことをやっている人がいますから、その人たちの研究を一つ一つ地図上にプロットするだけでもおもしろい。医学でも歴史でも言語学でも、なんでもそうです。そういうものを集めてアーカイブ化したいと思っています。地政学的に複雑な話も、地図の上を描いてみるとすぐに理解できることもあるので、みなさんに地図を使って自分の研究を表現してほしいと思います。

また、地図は図と地、つまり図柄ですからそれを眺めるだけでさまざま

まな発想がわいてきます。

たとえば、地図上でアメリカとフリカの位置関係を見てみると、アメリカの北西側（奴隸海岸付近）とアメリカの東側が大西洋を挟んで向き合っていることがわかる。そうすると、アメリカの「アフリカ音楽」の起源が、アフリカのなかでも北西側に限定されているのではないかと想像できます。他にも、綿花の産地、コットンピッカーと呼ばれる季節労働者の動きとジャズの聖地を一つの地図で見えたら、ジャズ音楽を分類できるかもしれないですよ。僕は音楽に関しては門外漢で、いま言ったことは単なる想像、仮説です。仮説の当たり外れは重要ではありません。でも、この仮説をもとに主題地図をつくったら、本当にいままでの音楽の歴史にはなかった新たな発見があるかもしれません。そういうことが起きたらおもしろいですよね。SFCの学生に地図を使って、いろいろな仮説を立ててもらえたら嬉しいですよ。

——先生は研究会も開かれていますね。シラバスには「美術に強いエンジニア、エンジニアに強い美術家を育成することを目的」とすると書かれています。これはどういう意味でしょうか。

数学に強い美術家として、M.C. エッシャーという画家がいます。透視図法の欠点を見ぬいた騙し絵が有名ですが、他にたとえば、鳥と魚が無限に絡み合ったパターン画が有名です。単一のモジュール、たとえば



半球カメラ

鳥で平面を構成する数学を考案しているんです。エッシャーは絵を描くためにその方法を考えたのだけれど、その過程で数学者でも気がつかなかったモジュールを考えだしました。美術制作を通して、まだ「数式になつてない数学」を見つけたということなんです。研究会も、そういう「言葉になつていない知恵、技術」を発見して共有する場所にしたいと思っています。

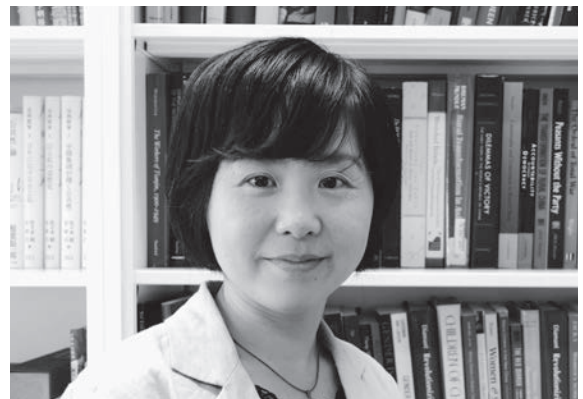
そういう知恵を見つげるためには、手を動かすことが大事なんです。なので、研究会では実際に手を動かして、ペーパークラフトや球体カメラをつくる予定です。手を動かしていると自分が知らないものをつくってしまうことがあるんです。僕自身、模型やカメラをつくるなかで、頭でわかる前に手がつくってしまうことがあります。

要するに、大人が図画工作を真面目にやってみたときにながでできるのかということなんです。やり方はさまざまです。写真や地図、あるいはパソコンや、人によっては球体カメラを応用した監視カメラの製作かもしれ

ない。あるいはかつこいい構造体の美学と力学を同時に行う人もいるでしょう。これらのデザイン、美術、エンジニアリングに関する研究に具体的な指導をしていくつもりです。

また、手を動かしてできてしまったものを、「なんだかよくわからないんですができました」というところから再出発して、その発見にはどういう意味があったのか、どういう応用ができるのかを考えて、人にわかるように伝えなければならぬ。手を動かして学び、それを言葉で説明して、知恵として蓄積していくことができればいいですね。これからの時代は、そういうなにかをつくらせて、さらにそれをちゃんと人に説明できる人が強いと思います。

注…アングラ劇：既存の演劇に対峙し斬新な演劇活動を展開したカウンターカルチャー。一九六十年代に隆盛。寺山修司の天井桟敷や唐十郎の赤テントが有名。



鄭 浩瀾
(てい・こうらん)

総合政策学部准教授
専門は中国近現代史

——ご経歴を教えてください。

中国の上海にある復旦大学で学部生として勉強をした後、同大学の修士課程に進学し、主に政治学を学んでいました。その中でもまず基礎的な政治理論から学びましたね。

復旦大学には語学のコースが二つあって、ひとつは英語、もうひとつは日本語のコースで、私は偶然日本語のクラスに所属することになりました。週に二コマほど、第一外国語として勉強したんです。勉強していくうちに、日本語の能力をもっと上達させたいと思ったので留学を考えていたんですが、機会がなかったので諦めています。

しかし修士課程のとき、交換留学というチャンスが訪れたんですね。当時は復旦大学からは毎年一名称だけ交換留学をすることができて、幸運にもその一名に選ばれたんです。そして二〇〇一年から一年間、慶應義塾大学に留学しました。そのうち、せっかく日本へ来

たので、もうちょっと勉強しよう
と思い、SFCの博士課程の受験
をしました。

海外の大学院に進むには、自分の
研究分野に合った指導教授を見つけ
なければいけません。そこで、当時
の復旦大学の先生が小島朋之先生を
紹介してくださったんです。小島先
生は現代中国研究の第一人者として
活躍された方で、SFCでは総合政
策学部長を数年間務めていらつしや
いました。博士課程では、中国の近
現代史、特に農村革命について農民
の視点から捉え直すということにつ
いて研究しました。

二〇〇四年からSFCでの非常
勤講師をはじめ、博士課程で学生
として自分の研究をしながら学部
生に中国語を教えていました。S
FCの中国語インテンシブの授業
では原則として日本語を使用する
ことができません。中国語をゼロ
から学ぶ学生に、日本語を使わず
に中国語の意味をどうやって伝え
るのか、授業の前には相当準備し
ておかないといけなくて、とても
緊張していました。

二〇〇九年からは、SFCを離
れてフェリス女学院大学で准教授
として六年間中国の近現代史を教
えていました。そして今年からS
FCに准教授として着任しました。
SFCでは中国語の授業と講義科
目、研究会を持っています。講義
科目では主に中国の近現代史につ
いての授業を受け持っています。

——研究会ではどのようなことをな
さっているのですか。

基本的には現代中国社会と中国の
歴史を学びます。今学期は子どもの
歴史、主に中国の教育制度や環境に
ついての文献を読んでいます。来学
期以降は、私の研究関心と履修生の
関心に合わせて新たにテーマを決め
るつもりです。

研究会では、輪読文献をまとめ
たものを各自発表して討論します。
そして並行して個人研究の指導を
しています。輪読しているテーマ
はあくまでも私が研究している分
野であって、学部生には、輪読を
通して過去の中国の歴史を知って

もらうことを望んでいます。個人
研究はそれぞれ自分の好きなテー
マを決めてもらうようにしており、
たとえば中国の都市開発の研究を
している学生もいれば、台湾の民
主化運動を学んでいる学生もいま
す。

子ども史は私が研究しはじめた
ばかりのテーマです。今まで中国
近現代史では政党やエリートたち
ばかりが注目されてきました。民
衆レベルの歴史はこれから明かさ
れていく分野だと思います。その
なかで女性や農民史は最近注目に
されていますけど、子ども史につい
てはほとんど未開の領域なんです
よね。私もここ数年子育てをして
いるので、この領域について調べ
たいと思っています。

研究会では、私が教えるという
よりはみんなが勉強していくとい
うことを大事にしていきたいんで
す。私たちは学問の扉の前に一緒
に立っている同志で、この扉を開
けたらそこはもう学問の海ですか
ら、そこから一緒に泳いでいけた
らと思います。

——研究会に入っている学生とはど
のように接していますか。

研究会に入った学生とはみんな
縁があるものと思っていますので、
勉強以外にもさまざまな面でアド
バイスやサポートをしていきたい
と思っています。ただ、研究に対
しては真剣な姿勢をもって取り組
んでほしいですね。学生には、自
分の好きなテーマや問題意識を大
切にするようにと言っています。

そんなことを言われると、ひと
つのテーマを変えずに研究し続け
なさいというメッセージとして受
け取ってしまうかもしれませんが、
途中でテーマを変えて新しいもの
になるのは普通だと思います。私
も大学に入ったときには文学作品
を読みふけていたし、大学院に
入ってから慈善団体が公共活動
をしようとも思っていたし、ラジ
オ局で記者として働いたときは、
研究者になろうとは思っていませ
んでした。博士論文を書いていた
ときも、一年半研究し続けていた
テーマに限界を感じて、勇気をだ

してやめたことがありました。研究者の道には、自分の研究意欲以外にも運があるので、目の前のことを好きなように一生懸命やっっていくことが大切だと思います。

——ご自身の研究の原点は何ですか？

研究の出発点は、自分の感覚や生活環境から離れた遠いところではなくて、日常生活にあると思っと思っています。というのも、私にとって現代中国社会研究をはじめるときは、身近な二つのことでした。一つは、おばあちゃんに対する愛でしょうか。祖母の出身である農村を訪ねたとき、あまりの生活環境の悪さに衝撃を受けました。

もう一つは、学部時代のラジオ局での記者経験です。当時、中国では市場経済化の波によって、国有企業が民営化されることになりました。その結果、一年間で約百万人も失業者ができました。そこで、ラジオ局が立ち上げた救援番組の記者として、貧困層の生活

を目の当たりにしました。当時は、失業しても社会保障が十分に受け取れませんでした。お金がなくてどうしようもない人々の姿を見て、一生懸命伝えようと、毎日インタビューをして寝ずに記事を書き続けていたのです。しかし、私が書いた記事はすべて採用されるわけではありませんでした。私は就職するのか、他の道を選ぶか悩んでいたのですが、そのまま記者として働いても無力さを感じるだけなので、もっと勉強しようと思いましたが。

この二つのことを経験してから、中国社会に対する研究意欲が生まれました。研究者として、私は生身の人間の姿を見たいのです。私は政策を決める国家の立場を考えるよりは、一般市民や農民などからの視点を重視しているのだと思っっています。

——SFC生全体にはどのような印象をお持ちですか。

私の受け持つ中国の現代史、特

に近現代史の講義に、みんなの関心があるのか心配していました。

しかし、講義がはじまってしばらくして受講生に感想を書いてもらうと、意外と関心が高かったことに驚きました。中国の歴史は、今の日中関係を見る上でとても大事なことなので、関心があるようであれば安心しました。長く続いていた王朝文化がどのように崩壊して、近代国家がいかにつくられていったのか、また、中華人民共和国の歴史について説明しています。現代中国について知りたくても、このあたりの歴史については知らないという研究レベルには至らないので、講義では基本知識を教えています。

これは日本全体の問題だと思っのですが、大学生の中国に対する理解が浅い。一部の人は世界史や日本史でよく勉強していますが、大半の人はあまり知らない。だから私がSFCの講義でまず中国近現代史の基本的な部分を教えます。

ただ、歴史の流れをそのまま教えるのではなく、最新の研究動向や問題点、研究視点などに触れなが

ら解説しています。

——SFC生にむけて一言お願いします。

私の場合、学部時代に読書に夢中になったことがよかったと思うんです。SFC生には、読書に限らず、とにかく好きなことに夢中になってほしいと願っています。好きなことというのも、学術的なことだけでなく、なんでも良いでしょう。真剣な姿勢をもって夢中にやってみれば、たとえ見えない形であっても必ず成果がでます。その過程で、悩みや迷いが生まれても、自然に身を任せてとりあえずやってみるといいことが大事です。

SFC生は反応がよくて頭の回転も速くて、みんな優秀でかわいいです。のびのびと、好きなことをとことん突き詰めてほしいと思っっています。

おとなりの研究会

さまざまな分野の学問が学べるSFCにおいて、研究会（ゼミ）はカリキュラムの中心だ。学生は授業で幅広く諸学問に触れ、そして研究会でそれを掘り下げる。当然、学生にとって研究会選びは自分の方向性の選択に他ならず、非常に重要だ。このコーナーでは、数多いSFCの研究会のうちから二つを取り上げ、各担当教員にどんな狙いを持って研究会を運営しているのかを聞いた。



20

新保史生研究会

新保 史生（しんぼ・ふみお）

総合政策学部教授
専門は憲法、情報法

——研究会のテーマを教えてください。

研究会のテーマは情報法についてです。主にインターネットの法律問題を扱っています。研究会の学生は全部で四十人ほどいます。

日常生活ではインターネットを使わないことがほとんどありませんよね。たとえば、私たちが何か取引するときもたいていのことはインターネットでできるようになってしまっています。しかしネット上では取引してはいけないことがいくつかあって、賃貸契約や重要な金銭に関わる契約は、あとでトラブルにならないよう、ネット上であっても必ず書面で契約を交わしますが、交通機関の予約、旅行、買い物などほとんどの手続きが書面を介さずネット上でできますよね。今の世の中はインターネットが日常生活に不可欠な存在となつてきているわけです。

しかし一方で、インターネットを使った犯罪が問題になっています。不正アクセス、コンピュータウイルスを感染させる行為（不正指令電

磁的記録供用罪）など、インターネットを使うからこそ起きる問題もあります。情報法が大変だけどもしいのは、情報法が現実世界の法律問題をすべてカバーするのももちろん、インターネットという仮想世界における法律問題についても考えなければいけないからです。情報法という分野はカバーしなければいけない範囲が非常に広いのです。

——研究会の学生の具体的な活動を教えてください。

インターネット社会で法律をつくるときに、既存の法律を改正する場合と、まったく新しく立法する場合の二つのパターンがあります。研究会は学部生がほとんどで、法律をつくる専門的な知識があるわけではありません。そのため、まずどのような法律問題があるのかを考え、調べて、どういう対処法があるのかを研究して、最後に法規制がされているのかどうかを確認します。どのように規制されているのか、規制されていないのであればどうやって規制し

ていけばよいのかということまで考えます。

一年間の活動ですが、春学期は学生がそれぞれで研究テーマを考え、発表して討論をします。秋学期は春学期に学生たちが取り上げたテーマを知的財産、個人情報、プライバシー、サイバー犯罪などのカテゴリーごとにグループに分かれて研究を行い、その成果をOpen Research Forum（十一月に行われるSFCの研究発表会）で発表するという流れになっています。

——インターネットについて法以外の観点から研究している学生はいま
すか？

そうですね。私の研究会には、他の研究会と掛け持ちしている学生も多くいます。たとえば3Dプリンター利用の観点から情報法を研究している学生がいます。3Dプリンターでつくられるのは複製物であり、著作物です。もとのデータを保護するのか、出力された物を保護するのか、そういったことを研究して

いる学生もいます。他には情報セキュリティやサイバー犯罪の観点から情報法を研究している学生もいます。インターネットについて研究していると、どうしても法律問題を避けることができないのです。

一つ注意してほしいのですが、私の研究会では公務員試験や司法試験などの試験対策は実施していません。なぜかという点、試験のために勉強する姿勢で物事を見てみると必然的に視野が狭くなるからです。狭い視野に陥ってしまうということがいろんな不利益を生じさせてしまうので、学生には適切なバランス感覚と広い視野で物事を考えてほしいと思っています。

しかし、実際には私の研究会からロースクールに進む学生や公務員になる学生も多いです。私の研究会では試験勉強をやるのではなくて、せっかくならばSFCという学びの場にいるのだし、インターネットにおける法律問題を勉強して、試験勉強は各自行うというスタンスで取り組んでもらっています。

——学生にメッセージをお願いしま
す。

私は車が好きで、法規制のあり方も車にたどっているのですが、車にはエンジンとブレーキがありますよね。いい車はどうして速く走ることができるのか。一般的にエンジンの性能がよくてスピードが出るから速く走ると思われているのだけれど、実はブレーキがよく効かなければ速く走ることができません。車は走っていれば必ず道路を曲がるわけですが、どんなによいエンジンを積んでいたとしても、うまくブレーキを効かせて減速しなければ、きちんと道路を曲がっていくことはできません。

これは科学技術においても同じです。技術的に可能なことをどこまででもやっていたいのかというと、倫理の面でいろんな問題が生じる可能性があるのです。ある一定の歯止めをかけることが必要となつてきます。ところが、ブレーキを強く踏み込むように規制を厳しくかけすぎると、将来可能性のある技術の発展をストッ

プさせてしまいます。アクセルとブレーキの踏み加減のバランスを考えた規制をつくるのが情報法を考えたときの課題です。

どうすれば技術の発展を阻害せず、世の中をうまくまわせるのかを考えなければいけません。学生には、「技術の保護と利用のバランス感覚」を身につけてほしいと思っています。





21

一ノ瀬友博研究会

一ノ瀬 友博

(いちのせ・ともひろ)

環境情報学部教授

専門は景観生態学、農村計画学

——研究会（ゼミ）でのテーマを教えてください。

研究会は二つの形態を持っています。ランドスケープ研究という名のもと、学生それぞれが個人研究を行う形態のものと、グリーンストラクチャーというグループワークを行う形態のものです。後者の形態では、一人がリーダーになりテーマを立ち上げ、それに他のメンバーが参加してグループで一つの研究をしていくという感じですね。

私の研究の専門分野は、生態学やそこから派生した農村計画や緑地計画などですが、研究会で扱っているテーマはすごく幅が広いです。鳥や昆虫などの生き物の研究をしている学生から、地域を活性化するために自然環境や地域情報化について研究を行う学生もいます。

私のスタンスとしては、まずはグループで研究して、その過程で先輩から研究の仕方を学び、さらに深く追究したいという人が個人研究をするといったやり方を薦めています。本当は自分で見つけたテーマを一人で研究してほしいんですけど、研究会の新規生が一からはじめるのは難しいですからね。気軽に研究をはじめられるように、グリーンストラクチャーでは履修選抜を行っていない

んですよ。

——そもそも生態学とはどのような学問なのでしょうか。

生態学は、基本的には生き物の行動やライフサイクル、生物と環境の関係などを研究する生物学のうちの一つの分野です。ただ、私の研究会では生態学より応用生態学を中心に扱っています。たとえば、生物を調べてより良い都市開発を考えたたり、人間が持続的な発展をするために人間と自然の共存はどうあるべきかということを考えたりしています。

もちろん応用生態学ではなく、純粋な生態学を学びたいという学生も来ます。SFCはバイオ分野に非常に力を入れていて、生物のことを知りたいといったても、生態学や生物学などさまざまな学問が学べるわけです。一ノ瀬研究会で研究するのも一つの手ではあるけれど、自分の研究したいテーマによって、異なるアプローチで研究した方がいい場合もあるでしょう。ですから、学生のテーマによって学ぶ分野をアドバイスすることもあります。

——グループワークでは、具体的にどのようなテーマを扱っているのですか。

二〇一一年の東日本大震災のころから継続しているものとして、宮城県気仙沼市復興支援プロジェクトがあります。現在は、舞根（もうね）地区という小さな漁村集落での高台移転支援と津波被災跡地の生物調査が中心のプロジェクトです。住民の皆さんが、震災の際にどのように行動し、避難したのか、そして高台移転に向けて何をしてきたのかをオーラルヒストリーの手法を用いて記録しまとめています。また、皆さんの地域の中での記憶を掘り起こし、それも整理しています。生物調査は京都大学や首都大学東京、東北大学など数多くの大学、研究機関と連携して、津波被災後の自然環境の変化をモニタリングしています。それらの成果の一部を『もうね 語り部帖』という冊子に取りまとめ、地域の皆さんに還元しています。

気仙沼復興支援プロジェクトは、東日本大震災が起きた直後にSFCで立ち上がりました。このプロジェクトは研究会の分野など関係なしに誰でも参加できるような、とても大きなものでした。しかし、現在は研究会のなかでも復興支援について扱

う研究会が減ってきましたね。

——SFCには生物多様性研究・ラボもありますよね。これは研究会とは関係ないのでしょうか。

生物多様性ラボはSFCのいろんな先生方にお手伝いしていただいて、二〇一二年に立ち上げました。SFCにおいて、生態学の分野で研究している研究会はほとんどありません。しかし、生物多様性や自然環境保全のためには、生態学だけでなくSFCのいろいろな分野が結果する必要があると思います。

扱っているテーマは、渡り鳥の経路追跡の研究から工場緑地における自然再生、そして山梨県の富士吉田市の木質バイオマスの活用までさまざまです。このなかの研究テーマをそのまま一ノ瀬研究会でのテーマにする学生もいます。ですから、研究会と完全に切り離されたものではありません。

その例として、数年前に一ノ瀬研究会の学生が、自然環境という観点から富士吉田市の地域活性化をテーマに研究していました。富士吉田市といえば富士山が有名ですが、富士山へ登る観光客があまり富士吉田市を訪れないという課題がありました。

た。本来富士登山というのは、市内にある浅間神社からはじまるのですが、今ではほとんどの人が五合目から登山するんですよ。五合目までもちゃんと登山道があるのに、あまり活用されていなかったせいで道が荒れていたんです。その道を整備して観光の手だてとして使えないかという研究でした。

——一ノ瀬研究会の学生にはどのような特徴がありますか。

私は研究会の活動としてフィールドワークをとても重視しています。また、野外に出て自分でデータをとって処理するには、統計など分析方法の知識が必要になってきます。さらに、卒業論文は最終的に英語で書くようにと求めています。そう考えると、学生に要求していることが結構多いかなと思います。

特に個人研究を進める上では、半期に五十本ほど本や論文を読んで報告する義務があります。学生たちはしんどいと言っているんですけど、そう感じるまで勉強するのは、どの分野でも当たり前のことだと思うんです。そうは言っても、しんどいと分かっているのにこの研究会を選んだのですから、ちよつと特徴的な人が多いのかなと思いますね。

——研究会のなかでモットーとしていることはありますか。

「とりあえずフィールドに出てみる」ということです。それは必ずしも生態学を研究する学生に限ったことではなくて、ヒアリングしたこと研究成果としてまとめる学生や、観光などの抽象的なテーマを扱う学生にも当てはまります。今の時代はなんでもインターネットで調べてわかった気になってしましますが、現場へ行って自分で調べる作業が一番勉強になります。

もう一方で、文献や論文を読んで、これまで人がどのような研究をやってきたのかを知ることでも大切です。その上で、自分なりに好きな研究ができればいいと思っています。ですから、実際に現場に赴くということに加えて、知識を蓄積していくことも大切だと思っています。

——研究会選びに迷っているSFC生に一言お願いします。

自分の興味のある分野のイベントに参加するだけで、ずいぶん視野が広がると思います。たとえばこの月に、飯盛義徳先生（総合政策学部教授）と中島直人先生（現、政策・メディア研究科特任准教授）と、さ

らには文教大学の先生も加わって、新上五島町にてフィールドワークを行いました。そのフィールドワークは特別研究プロジェクトとして、研究会の学生以外も参加できるようにしたんです。結果として一年生がたくさん参加してくれました。このような機会を逃さずに、いろいろな先生とお話するのがいいと思います。教員の間でも、こういう学生がいるんだけど、彼の研究分野に合うような先生はいませんかと話したりするんですよ。気軽に相談してくれる、「じゃあこの先生がいいよ」とアドバイスができます。

一ノ瀬研究会ではいつでも聴講自由なので、実際に来てみて雰囲気は合っているかを確かめてもらいたいですね。また、同時に複数の研究会を履修できるというSFCの特徴を活かして、一見違う分野の研究会を掛け持ちしている学生もいます。そうすると意見交換のような形で私もいろいろな先生とお話ができますし、そこではたくさんさんの新しい発見があつて、とても楽しいです。さまざまな意見を取り入れた上で、気楽に研究会に入つてほしいですね。

sfcism

vol.07

SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人がいる。
このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。
今回は、競泳選手で2012年のロンドンオリンピック男子200M平泳ぎで
銅メダルを獲得した立石諒さんにお話をうかがった。



立石 諒

(たていし・りょう)

環境情報学部 2012 年度卒業
所属は株式会社ミキハウス、GSPR

——今シーズンの意気込みを教えてください。

今シーズンはそこまで力んでないんですよね。世界選手権でメダルを獲りたいとか、そういう気持ちがあったくないんです。昨年は肘を手術して世界大会に出場しなかったの
で、今年は落ち着いて現状を把握して、自分の立ち位置を知る気持ちでリラックスして取り組もうと思っています。

——現役を続けていくうえで、どのようにモチベーションを維持しているのですか。

正直なところ二〇一三年、一四年は水泳へのモチベーションが湧きませんでした。ロンドン五輪の結果で満足してしまっていたんですよ。テンションも上がらないし、どうしようかなと思っていたら肘を悪くしてしまつて、一週間に四回くらいしか泳げなくなりました。それで、いろいろな人に相談して、肘を治すことを決意しました。

しかし、手術の後も思うように肘が動かないときがあつて、おかしいなと思つていました。練習にあまり参加せずにいたのですが、そんなと

きに北島康介選手が練習や合宿に誘ってくれたので、参加する気持ちになれました。

そのうち試合に出る機会も来て、モチベーションが湧いてきました。康介さんが頑張っている姿を見ると負けれないと思うし、良いレースをしたと感じるんですね。北島選手をみると自然にやる気が湧いてきます。先輩でもあり、ライバルでもあるのかな。僕は幼いころから北島選手を見てきたから、憧れの存在でもあります。一回勝とうが、二回勝とうが、尊敬の念は変わらないですね。常に自分の先を行っている康介さんには見習うところしかないんです。

たとえば、僕が一ヶ月かけて調整するところを、康介さんなら一週間できちゃいます。そんなときに、その差はなんだろうって考えるのが楽しいんですよね。常に学ばせてもらっています。みなさん気づいていらっしやらないと思うんですが、北島選手とのレースはいつも楽しくて、大抵、僕は笑っているんですね。

みなさんが抱えているアスリート像と実際の僕はまったく異なるんじゃないのかと思います。アスリートはストイックだと思われがちですが、僕はストイックな人が苦手なん

です。ストイックであることを目的にして、本来の目的を見失っているような気がするからです。そういう人が自分の成績を満足しているのを見るとすごく腹がたつ。僕自身もロンドンでの銅メダルに満足していません。まだまだだなと感じています。

自分のことだけでなく、周りに視線を向けることは社会人でも学生でも大切なことですよ。自分がどういう行動をすべきで、どこへ向かうのかを俯瞰的に考えなければならぬ。そうでないと、立ち止まったときに何が悪いのかわからず、本来の目的を見失ってしまいますから。

——SFCでは仰木裕嗣先生(政策・メディア研究科准教授)の研究会に所属されていたのですよね。

そうですね。実は仰木先生は僕が大学に入る前から声をかけてくれていたんです。仰木先生はレーザ・レーサーという水着の開発に携わった数少ない日本人です。相当な知識量と水泳に対してのガッツをお持ちなので、SFCに入る前からお話ししてみたいと思っていました。高校生のときにその機会があったので、SFCを受けてみようかなと思えました。

ですから、先生には研究会に入る前から頻りに会っていました。研究会に入ってから、扱う内容が難しくすぎて半分以上はわからなかった(笑)。いつも水泳に関して学ぶわけではなく、三方向で動きを検知するモーションセンサーを使って、身体の運動機能を研究していました。難しかったけれど、少しずついろいろなわかってきて、卒業論文では自分の水泳に関することを書かせてもらいました。毎回研究会の時間が終わると、先生に「僕の今の泳ぎはこんな感じなんですよ。」と話していました。

——学生時代はどう過ごしていましたか。

講義はたくさんとりましたね。SFCの講義はおもしろく、いつも楽しんで受けていました。練習場が近かったこともあって、三田キャンパスの講義もたくさん履修しました。

また、水泳部は仲が良く、社会人になつてからもみんなゴルフをしたり、ゲームに行ったりしています。みんな働いているからなかなか時間が取れないけど、それでも月に一度は会っています。あと、湘南台に好きなパスタ屋さんがあつて学部時代

はよく通っていました。今でも帰国すると必ずそのパスタを食べたくなつて、家族を連れて行ったりします。

大学生活は忙しかったけれど、とても楽しかったですね。半年以上、海外遠征に行つたこともありました。だからこそ、日本にいるときは大切に時間を過ごして、大学の友人を大切にしていました。

——SFC生にメッセージをお願いします。

最後まで諦めないでほしいですね。自分の目標を達成できるかはわからないかもしれないけど、みなさんまだ若いですから、挑戦し続けることができます。だから、諦めずに取り組んでほしいです。

大学時代に先輩にしてもらったことはたくさんあります。今度は僕が後輩に受け継いでいきたいし、そうやって伝えていくことが重要だと思います。どんな形で伝えていくかわからないですけどね。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。
しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、
それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。
今回は、小澤太郎総合政策学部教授に若かりしころを振り返ってもらった。



大学院時代、神戸にて

小澤太郎

—ご経歴を教えてください。

小学生のころの僕は、よく先生を困らせていました。団体行動が苦手だったんです。

昔の小学校では行進の訓練をさせられたのですが、僕はそれができなかった。角を曲がる時に注意されるんです。先生は「直角に曲がりなさい」と言うのだけれど、どこを直せばいいのかわからない。聞いてみても納得のいく答えが得られず、何も言わないと怒られるから、とりあえず「わかりました」と言う。だけど、本当はわかっているから何度も同じ間違いを繰り返す。そうすると、もつと先生が怒るという悪循環でした。納得のいかないことをとりあえずこなすということができなかつたんですね。

これは日常生活でも同じでした。が、いくら言われても理解できないので、先生が段々興奮してきて怒鳴られる場面もよくありました。担任の先生はとても苦労されたのではないかと思います。中学生になると、先生の指示をとりあえずは守れるようになりました。でも納得できているわけではないから、心の中ではずっと「なんでこんなバカなことをやらなきゃならないんだ」と思っ

ていました。

勉強の方もムラがあつて、良いときと悪いときの差がとても激しかったです。あんまり身を入れて勉強していませんでした。でも、なかつたのですが、漠然ともつと勉強をしなきゃいけないという思いがあつて、高校受験を機に猛勉強をはじめました。

ただ、はじめたのが中学三年生の冬休みからだつたんです。狙っていたのは慶應義塾高等学校（以下、塾高）で、試験があるのは二月だから勉強期間は一ヶ月と少し。いま考えるとそんな短い期間で受かるはずがない（笑）。ですが、そのときの僕は「これだけ期間があれば十分だ」なんて勝手なことを思っていました。短い期間でしたが本当によく勉強して、合格することができました。そこから僕の生活が一変するんです。

塾高に入つて驚いたことは、先生がなにも教えないことです。ある日、生物の実験をするという授業で、最初に一通りの説明がされて、あとは「はい、やつて」と言われてしまった。中学では先生が最初から最後まで、あれをやらせこれをやれと指示していたのに、です。途方にくれましたよ。しかし、だんだんとそういうやり方慣れてきて、結局自分の頭で考えるしかないんだということに気が

つくと、慶應流のいいところがわかつてきた。つまり、学校は僕たちを信用して、自由を与えてくれたりたんです。

自由には責任が伴うということも、塾高で学びました。塾高にもよからぬことをする輩はいて、五百円でしたが人からお金をせびりとつた奴がいたんです。彼は一発で退学になりました。でも誰も同情はしなかつた。人に危害を加えてはいけないうこと、そういうことをすれば罰を受けるのは当然です。そうやって、高校生のときに独立自尊とはどういうことかを学びました。

ただ、勉強の方は相変わらずやつたりやらなかつたりでした。成績は悪くはなかつたんですが、あまり身を入れた記憶もありません。しかし、将来のことについては考えていました。二年生のときに、興味を持っていた工学部の三年生向け説明会にもぐりこみました。ですが、その説明がつまらなくて逆に工学部に行く気がなくなつてしまつたんです。

どうしようかと思つていたのですが、そんなときにたまたま新聞に連載されていたジョン・ケネス・ガールレイスとケネス・エワート・ポー

この二人は政治に関することも扱う分野横断的な経済学者でした。この対談がすごくおもしろかつた。それで経済学部に進もうと決めました。

成績にも問題がなかつたので、無事経済学部に入れたのですが、そこで教えられていたのは古典的な経済学だった。ガールレイスやポールディングのやつていることはまったく出でこず、最初は「なんだこりゃ」と思いました。でも、自分が得意な数学が使われているし、数学の勉強だと思ふことにしてきちんと学びました。というのは、大学に入ったらちゃんと勉強しようと思つていたんですよね。高校まではやつたりやらなかつたりでしたが、大学ではそんな生半可な態度は許されないとなくなつていました。

経済学以外にも哲学書や社会思想書をかたづけしから読んだり、履修選抜試験で一般人試組に負けたのをきっかけに、夏休みまるごと使つて英語の勉強をしたり、これまでとは違つて一生懸命にやりました。得意だつた数学も、工学部の数学の教科書を使つて復習しました。すべて一から勉強し直しましたね。

特に哲学に関する著作を読んだことは僕の学問的姿勢に深い影響を与えたように思います。難しくどこ

まで理解したかはわかりませんが、僕が学問的真理の存在や社会的な正義を心のどこかで信じているのは、このころの読書の影響であるような気がします。

——勉強に身を入れはじめたのは大学に入ってからとのことですが、それまで本気になれなかった理由はなんでしょ。

もしかしたら、子どものころの体験に関係があるかもしれません。小さいころ、僕は天文図鑑を読むことに熱中していました。子どもには難しい本でしたが、文字を覚えながら、少しずつ読んでいた。

そんなある日、父親に「将来は何になりたい？」と聞かれ、僕は「天文学者になりたい」と答えました。そうしたら父が驚いて「そんなものになつてどうやって食べていくつもりなんだ」と言っただけです。これがとてもショックだった。父は優しくて、僕を叱つたことがないような人でした。そんな父が非常に動揺しているのを見て、「なにか悪いことをしたのかも知れない」と思いました。それから、天文学者になろうという気持ちがなくなつてしまつたんです。そういえば、僕は数学がずっと好

きで、美しいとさえ思っていたのですが、物理や化学の成績はそれほどよくなかった。自然科学に興味を持つてなくなつたんですね。勉強自体は好きなんだけれど、なにか悪いことをしているような気がする。そういう気持ちの揺れが成績のムラにつながつたのかもしれない。

それでも大学に入ったときにちゃんと勉強しようと思えたのは、祖父の影響だと思います。祖父は劇文学の研究者で、慶應の文学部で教壇に立つていました。非常にまじめな人で、家では研究している姿しか見たことがなかった。そういう祖父を見ていたので、学問というものは素晴らしいものだ、という思いはずつとあつたんでしょ。

大学一年目は学び直しの年でしたが、二年目も勉強は続けました。経済学部では二年次に自由研究というプレゼミがありました。これはやつてもやらなくてもいいのですが、僕は二つ、しかもどちらも忙しいことで有名な自由研究をとりました。一つは経済理論の長名寛明先生の自由研究で、もう一つは労働経済学の島田晴雄先生でした。

お二人とも経済学者なのですが、長名先生は理論が好きで、現実のこちやごちやした問題にはあまり興味

がなく、対して島田先生は現実の経済政策や最新の経済問題を扱っていました。おそらくここに、僕の学際的な側面の基礎があるのだと思います。

三年次は最初はちゃんと理論を学んだ方がいいだろうということでも、そのまま長名先生のゼミに入りました。とても厳しい先生で、少しでも論理に隙があれば容赦なく追及されました。学生を褒めているところをみたことがなくて、あるときあまりに厳しいので、「もうちよつと褒めてくれれば、やる気がでるんですが」と先生に言ったことがあります。そうしたら先生は「褒められなきゃやらない勉強ならやらなきゃいいでしょう」と言いました。当時の僕は「そうは言っても」と思いましたが、でも先生が言うことは正しいんですよ。要するに勉強は褒められるためにやるものじゃないということです。長名先生には修士二年までお世話になり、徹底的に理論を教えて頂きました。

ただ、僕は単なる経済学ではなく、ガブルレイスやポールディングのような「政治経済学」をやりたいという思いをずっと持っていたんです。そんなときに修士の授業で加藤寛先生（初代総合政策学部長）に出会い

ました。加藤先生は長名先生と違って、しきりに僕のことを褒めてくださつたし、まさしく政治経済学を専門とされている方だったので、「博士ではこの先生の指導を受けよう」と決意しました。長名先生には何もをいれませんが、加藤先生には何も言わず、博士課程の願書には勝手に指導教授の欄に加藤先生の名前を書きました。

博士課程の段階で指導教授を変えろというのは当時としてはかなり異例のことでした。常識的に考えれば落とされるんですが、当時の僕は「実力を見ていただければ絶対に受かる」と思っていた。よほど自信に満ち溢れていたんでしょね。加藤先生も驚かれたようですが、授業で顔を覚えていただいていたようで、無事合格できました。

加藤先生は当時第二次臨時行政調査会のメンバーで、実務家との会合が頻繁にありました。僕はそういう場に連れて行つてもらつて秘書の方々と話をしたり、実務家の方と同期したりして、理論通りにいかない実際の政治というものを体感することができました。自分の研究では整合的な理論モデルを組むことばかりしていたので、これはとてもいい経験でした。

When I was young

大学院時代は学際研究に興味があったこともあり、研究室以外のいろいろなところに出張っていった。経済学以外のことも学びました。社会学

研究科で、井関利明先生（元総合政策学部長）の「経済社会学」という授業に論戦を仕掛けに行ったり、法学研究科の院生に混じって政治学の勉強をしたりしていました。同じ経済学でも計量経済学をやっているところに殴りこみにいって、その基礎を学ばせていただいたりね。そうやっていろんなことを学ぶのが楽しかった。

考えてみると、今SFCの学生がやっていることに似ていますね。ただ当時は、大学院生が学際的な学問を実践するのはタブーに近かったんです。批判も受けましたし、ある教授から家に電話がかかってきて、「君はそんなことやる身分じゃないんだから、今すぐ動きまわるのをやめろ」と言われたこともあります。

でも、僕は学際的に考えない限り、政治経済の複雑な現象は捉えられないと思っていましたので、そういう活動はやめませんでした。自分の身を守ることも考えた方がいいんじゃないかと言われたけれど、正しいと思ったことはまげられませんからね。

——最後にSFC生へのメッセージをお願いします。

一般的にSFCの学生というと要領のいいイメージだけれど、実はSFC生は要領が悪いのではないかと思っているんです。他の学部でも教えているからよくわかるのですが、他学部生ももちろん頭は良いんだけど、その頭を試験対策に使ってしまふんです。要領よくやろうとするんですね。だから僕が試験問題をガラッと変えたりすると、0点続出みたいなことになる。それは定跡しか指せないチェスプレイヤーのようなもので、非力なんですよね。それとは違って、SFCの学生は自分でなんとかしようという気持ちがある。結果的には点に結びつかないかもしれないけれども、今の不確実な時代にとっても強いのではないかと思っています。そういう良い要領の悪さを持っている。

それにわけのわからない人もSFCにはたくさんいますよね。突拍子もないことを言う人がたくさんいる。でも、要領よく自分を大きくみせようとする人間より、良く見せたいのか悪く見せたいのかわからないような人間の方がおもしろいですよね。そういう意味でSFCにはおほ

しろい学生が多いと思う。

ただ、おもしろさとは別に身につけておかなければならない基礎的な学力というのがあって、それはやっぱり身につけなきゃいけない。おもしろいだけで大成しないことが多いように感じます。それは、基礎的な力を試され、できなかったときに自分のことをダメだと思ってしまうからなんです。でもそこで諦めてしまふと、自分の可能性を狭めてしまふ。

なにもすべて完璧にできる必要はないんです。ただ、「これくらいはできない」という最低限のレベルというものがあって、それを下回らないぐらいの能力なら才能がなくたってなんとかなります。僕が大学一年生のときにやりましたように、自分に何が足りないのかを見直して、ないものを一から学び直す。そうすればいいんです。

僕の経験から言えば、そうやって学び直してみると、以前できなかったことでもできるようになります。壁にぶつかった後なら、なぜその能力が必要か自分で納得できていきますからね。これができなきゃ前に進めないと気づいたとき、人間は石にかじりついたってやるものです。だから、諦めたり逃げたりするのはダメです。



小澤 太郎

(おざわ・たろう)

総合政策学部教授

専門は公共経済学、ゲーム理論

KEIO SFC REVIEW

58

発行人

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

編集長

佐藤 響子 (環境情報学部 3年)

副編集長

林田 早紀子 (環境情報学部 3年)

坂本 美佳 (看護医療学部 2年)

編集スタッフ

中村 幸嗣 (総合政策学部 3年)

樋口 誓一郎 (環境情報学部 2年)

佐藤 彩華 (看護医療学部 2年)

高城 栄一郎 (環境情報学部 1年)

湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

清水 唯一朗 (総合政策学部准教授)

事務局

田坂 真美

From Editor

みなさま、58号をお手にとっていただきありがとうございます。ありがとうございました。

今年はSFCができてから25年です。25年を迎えて、改めて「SFCらしさ」ってなんだろうと考えるようになりました。なかなか抽象的な問いで、簡単に解が出るようなものではありません。

ただ、今回取材を続けていくなかで、三田キャンパスの授業をとっている学生が言った「SFCにいるからこそ、自分の意思で三田の授業を取ることができた」という言葉がその問いへの一つの答えだと思っています。

SFCという陸の孤島のような場所にいるからこそ、もっと広い世界を見てみたくなる。SFCで知った「学ぶことのおもしろさ」を、他の場所で味わってみたい。こういう自然に湧き上がる知的好奇心が、学生たちの研究や知見を深めていくのだと思うのです。そしてそれは、「SFCはネットワーク型のキャンパスなのだから、必要に応じていろいろなところへ学びに行くべきだ」という相磯先生の考え方と一致します。

もっと知りたいことがあるから他の場所へ学びに行く、そういったポジティブな意識をもつ学生が多いことが、SFCが25年かけて培ってきたもの、富田先生の言葉を借りるならば「SFCスピリット」なのかもしれません。

2015.07.01 佐藤響子

発行日

2015年7月30日

発行所

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

製作・印刷

株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。
最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会までご連絡ください。

KEIO SFC REVIEW は
学生編集スタッフを募集しています。

募集中

興味のある方は、keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
までご連絡ください。



KEIO UNIVERSITY SFC

25TH

ANNIVERSARY

KEIO SFC REVIEW

ISSN 1343-3318